



「ポスト・グローバル時代」の 地政学

杉田弘毅 著

新潮社 (2017年11月) 1,400円+税/293ページ

一人 一冊



評者



津田塾大学
学芸学部 教授

西川 賢

「怒り」をキーワードに 複雑化する国際社会を読み解く

国際社会が激動の時代を迎えている。米国の政治学者であるウォルター・ラッセル・ミードが言うように、中国やロシア、北朝鮮、ISIS（イスラム国）など、強大なパワーを背景として国際秩序を自らに有利なように変更しようとするアクターが跋扈していることが、そうした大変動に作用していると考えられている。

これらのアクターが跳梁し、強引な現状変更が立て続けに行われれば、国際社会を支えてきた既存の法規範は無効化され、国際秩序は急速に無秩序と化していく。これこそ、われわれが日々見聞する国際社会の過酷なりアリエーではなからうか。

本書は、国際社会に生じつつある重要な変化を網羅的に描き出し、現実を俯瞰することを可能にする良書である。著者の杉田氏も、ミード同様に、現在の国際社会は各アクターがむき出しのパワーを用いて隙があれば覇権を狙って相争う「地政学的競争の逆襲」ともいえるべき時代に突入しており、従前の国際秩序が揺らぎつつあるという見解を提示する。

著者の見解に従えば、トランプ大統領が登場したことは極めて重要な意義を有する

現象である。なぜならば、それはアメリカまでもが自由で開かれた国際秩序の維持者としての理念的役割を捨て、自国の偏狭な利益を第一に考える（その意味で、もはや中口などと大差ない）地政学的アクターに変貌しつつある兆候と考えうるからである。さらに、著者はこのような地政学的状況の復活を促した要因にも切り込んでいる。

それは「怒り」である。グローバル化した経済が生み出す経済格差や移民の流入、宗教・イデオロギーなどの価値観の相違、行き過ぎた多文化主義への憤懣——怒りを抱えた人々は、自由で開かれた国際秩序に問題の原因を求め、感情を過激なたちで表出させる。そうすることで、対外戦略を自国の偏狭な利益のみを追求する方向へと歪めていく。

本誌の読者は経済・金融に関心を持つ方が多く、国家の外交・安全保障はそれほど重要ではないと思われるかもしれない。しかし、著者が指摘するように、現在の国際社会は経済制裁や金融、貿易などが「兵器」に変わる手段として地政学上の競争に利用される「地経学」の様相を帯びつつある。経済と外交・安全保障相互の知識を有効活用することが、かつてなく要求される時代ともいえる。それゆえに、本誌の読者にこそ、ぜひとも一読することを強くお勧めしたい一冊である。